時の蘇生・柿の木プロジェクト

−心の中に「平和の砦」を築く−

宮島達男（現代美術家）　池田史子　後藤寿和　（gift_）

原爆と「時の死」

池田　「本と川と街」という、本所深川エリアを発信地として去年からスタートした、地域の人々によるアートプロジェクトで、ぜひ柿の木プロジェクトを人々に伝えていくきっかけとなることをさせていただきたいとお願いして、今日はお話も聞かせていただくことになりました。
そもそも、柿の木のプロジェクトのきっかけは、1945 年の長崎への原爆投下にある訳ですが、本所深川エリアも 1945 年とは縁の深い場所で、3 月に東京大空襲を受けてほぼ全滅し、そこから復興して今に至っているという土地です。
また、清澄白河の東京都現代美術館には、宮島さんの作品のエターナルな展示もあり、非常に縁の深い土地柄ということで声をおかけしました。
私はずっと宮島さんのデジタルアートの作品の大ファンで、大好きなアーティストですが、その方が柿の木プロジェクトを始められたっていうことは、すごく意外だったんですね。それは、そこに至るエピソードを知らなかったせいだと思うんですけれども。
何がこれを始めるきっかけになったのか、ということからお話を伺えたらと思います。

宮島　高校の頃は美術部の部長をやっていて、原爆とか戦争とかには全く関心がない普通の高校生でした。たまたま修学旅行で広島方面に行きまして、原爆資料館を初めて訪ねたんです。今みたいにソフィスティケートされてなくって非常におどろおどろしい展示でね、生々しいというかリアルというか。怖くてね、ビビっちゃうわけですよ。
でもね、何か不思議な得体の知れない沸々とした怒りのようなものが沸いてきて、それが何なのかよく分からないまま、その怒りみたいなものを鎮めるような思いで、持っていたスケッチブックに原爆資料館の前にある原爆ドームをスケッチして、心を鎮めていった。そういう強烈な印象がありました。
それからずっと経ってアーティストになって、その間は原爆や戦争のことは一切忘れていたんですけど、1990 年に広島の現代美術館で個展があったんです。その時はもうデジタルカウンターの作品を作っていて、どんなテーマで作品を作ろうかと考えた時に、高校の時のことがフィードバックしてきまして。あの時の、僕自身の怒りというのがどこにあったのか探りたくて、考えると人間に対する不信感・絶望だったような気がしました。人間が、同じ人間に対してあれだけひどいことをできてしまう、その心の魔性といいますか、人間が持っている善性・良い部分と、悪い部分・悪魔的な部分、その両方を非常に強烈に感じて、それをテーマに「時の死 Death of Time」という作品を作ったんです。

作品は、ずっとつながっている人類の長い歴史を「一本の線」になぞらえていて、その真ん中に、ずっとカウントしないカウンターガジェットを置きました。そこは真っ暗なのでよく分からないんですけど、実はそこにもカウンターガジェットは存在してるんです。ただこれは凍りついたようにずっと動かないままで、そこは時が死んだようになっている。「時の死」というはそういう意味で、つまり人類の歴史を分断するような、強烈なものが原爆だったのではないかという、そんな思いで作った作品です。そういうふうに、自分の中ではアートと原爆や戦争というのは、割とすんなり繋がっていたんです。

Death of Time（1990-1992）

被爆柿の木2世との出会い

宮島　それから数年後、95 年に長崎で展覧会があった時、やっぱり長崎も原爆の話が色々とあるので、それをテーマにした作品を作ろうとリサーチしているうちに、被爆した樹木が結構たくさん生き残っていて、その中でも、被爆した柿の木が再生したというニュースを見つけました。それが、樹木医をなさっている海老沼先生で、黒焦げになった柿の木をケアして、実がなるまでに復活させたんです。そして、その実から種を取って 2 世の苗木を育て、長崎を訪問する中学生とか修学旅行生に配る活動を、既に始められていました。
で、いきなり電話をかけて「育てた柿の木の 2 世の苗木を見せてください」って無理を言いました。急に知らないアーティストが来たので、海老沼先生も初めは訝しがってましたけどね、でも「どうぞどうぞ」って鉢植えのまんまの柿の木を見せてくれたんです。

半身を焼かれながら、生き残った柿の木

これが本当に綺麗でね。この柿の木は被爆という悲惨な被害を受けた親から生まれた 2 世で、つまり戦争を全く知らない世代なんだけれども、それでも宿命というものを背負っていて、その繋がりの深さとか、それでも健気に生きていこうとする姿とかに、なんかね、こうジーンときちゃって。ものすごく美しく見えたんですよ。で、子どもたちにぜひ伝えていきたいなっていうことを、すごく感じました。

被爆柿の木 2 世の苗木

池田　黒焦げになったお母さんの木の写真を見たことがあるんですけれども、これが蘇生するっていうことがまず奇跡だし、しかも今、たくさんのその子どもの苗木たちが世界中に芽吹いて根を張って生きていて、それぞれの土地の子どもたちに伝えていってくれているのも奇跡だし、海老沼先生が蘇生させたすぐ半年後くらいに、宮島さんがそれに出会ったことも奇跡だなと思っていて、とても運命的なものを感じます。

宮島　被爆樹木は柿の木以外、他にもあるんです。でも、僕がたまたま出会ったのが柿の木で、柿ってヨーロッパでも非常に親しみを持って迎えられる樹木なんですよ。なので、たまたま出会ったというのが正直なところですけど、おっしゃるように運命的な出会いだったのかもしれません。

柿の木プロジェクトの始まり

池田　90 年に広島で「Death of Time」をやって、その 5 年後に長崎でこの柿の木と出会うって、やっぱりこれはもう、神様が結びつけてくれたのかなと思っちゃいますよね。

宮島　そうですね。「水の波紋’95」という展覧会で、長崎展のあとに東京展があって、東京で被爆した柿の木 2 世の苗木を展示して里親を募集するというところから、柿の木プロジェクトが始まるんです。

池田　「水の波紋’95」展で、青山のワタリウムのウィンドウに展示された柿の木ですね？

宮島　そうです。この鉢植えは、僕が海老沼先生のお宅で見せていただいた苗木そのものなんです。「ぜひ展示させてください」ってお願いして、海老沼先生が「わかった」って言って貸し出してくださって、募集を始めました。でも、ただの「里親募集」だけだと植えたら終わりになっちゃうので、そこは一つ、ちょっとひねりを加えようということで、子どもたちに植樹をしながら、何かしらの表現をしてもらおう、と。子どもたちに、自由な発想で、大人たちも交えて、絵を描いたりダンスを踊ったり。色んな表現活動をしてもらって、それで柿の木を植えていく。そうすることで子どもたちに記憶が残っていくんじゃないか。子どもたちと、そして柿の木の両方が、だんだん大きくなっていくのを見守りながら、思い出とともに、平和の尊さとか命の大切さっていうのをフィードバックしてくという、そんな狙いがあったんです。

展示された被爆柿の木２世の苗木

池田　今年ワタリウムで行われた、95 年の「水の波紋」展のリバイバル展覧会で、子どもたちが描いた絵にデジタルの数字を埋め込んだ、この作品も展示されていましたね。

宮島　彼ら、当時は小学3年生だったのかな。3 年生の子どもたちが大きくなって、10 年目の時には大学生で、今やもう 35 歳。時の経つのはあっという間です。

植樹第１号・柳北小学校でのワークショップ

繋がっていく「ストーリー」

宮島　去年の秋、植えた柿の木が大きくなって実がなったということで見に行った時に、その子たちも来てくれてね。

池田　わあ、嬉しいですね。

宮島　その子たちね、もう赤ちゃんとか抱いてて（笑）

池田　彼らの子どもたち、そしてまたその子どもたちに、「なんでお母さんやおばあちゃんがこの木を植えたのか」という話を伝えていってほしいですね。

宮島　だから、こうやってストーリーが繋がっていく感じが、とても面白いなーと思って。
柿の木を植える時には、なるべく、このストーリーを書いた立て看板を設置していただくようお願いしているんです。それを読みながら、親から子へ、子から孫へと伝えていけたら、本当に嬉しいなと思っています。

池田　柿の木を植える時に、みんなで何かを作るっていうのと同時に、この 10 周年祭という、10 年経った後に子どもたちと柿の木が再び出会ってその記憶を確かめ合うっていうのが、すごく素敵だなと思います。これが、植えた時の子どもたちですね？

植樹当時、小学校3年生の子どもたち（1996 年）

宮島　そうです、3 年生の時ですね。一番左に見える女性の方が、このクラスの担任の畠山先生。この先生が応募してくださいました。里親募集の第1号なんです。

池田　台東区の小学校で、実は今はもう、その小学校は廃校になっているそうなんですけど、柿の木は大事に大事に育てられてすくすく育って。

宮島　隣の、柳北公園という所に残っています。

10 周年祭での再会（2006 年）

池田　残っているその木を訪ねて、10 周年祭が行われたわけですよね？

宮島　みんな大きくなったでしょう？もう、いい青年ですよね。

池田　みんなでまた集まって同じ木を囲むというのが、素敵なプロジェクトだなと思います。

宮島　ほんとにありがたいですよね。お母さんたちがずっと繋がっていてくれて、声をかければ伝言を回してくださるんですよ。「柿の木のコミュニティ」みたいなのが出来ているんです。

大きく育った柿の木の下に集合。次世代も参加（2020 年）

池田　皆で柿の木のお世話をしてる時にも、「なぜこの木を大切に育てていかなきゃいけないのか」っていう話がきっと伝えられていくんだろうな、って思います。

心の中に「平和の砦」を築くアート

池田　私たちは、ここ清澄白河でデザインの仕事をしながらギャラリーみたいなこともやってるんですけれど、もう一つ、越後妻有にも拠点を持っています。松代というエリアで「山ノ家」という、民家を改装して 1 階がカフェ、2階がアーティストインレジデンスにも使えるし、一般の方も泊まっていただけるという場所を運営していて、実は宮島さんともそこでお会いしました。

この松代の太平地区、山ノ家から歩いて行けるところに柿の木が植えられていて、2015 年の大地の芸術祭の時に、そこで柿の木プロジェクトの皆さんと宮島さんと出会いました。その時にもご縁を感じて、何か、この柿の木のことを伝えていくお手伝いができないかなと思っていて、ようやくお声をかけることができた次第です。

私は、宮島さんが柿の木プロジェクトを始められたことに対して、最初は意外だったんですが、その次に、すごく嬉しかったんです。

自分も宮島さんと同じような原体験があって。私は、自分の父が持っていた平和への希求、「反戦」や「人類が原水爆のようなものを作ってしまったことの悲しみと憤り」みたいなものを、ごく自然に共有させられていた子どもでした。ただ私は、それを伝える術が全然なくて。

高校生の時に、東京大空襲のドキュメンタリーの本が家族のお茶の間に置かれていて、何気なくそれを手にとって読んで、やはり宮島さんが感じられたような同じ、憤りというのか、何と言ったらいいんだろう…つらかった。何故に同じ人間がこんなことしなきゃいけなかったのか。今思い出しても涙が出ちゃうんですけど。だけど、その思いを伝えていく術が何もなくて。

だから、世界的な「伝わる言葉」を持っている方がこれを始めて下さったことが、すごく嬉しかったです。

宮島　それほど強い思いを持っていらしたとは存じ上げなくて、恐縮します。

池田　私も父に伝えられた、さっき宮島さんが「悪魔的な力」っておっしゃったもの、なぜそういうものが人間に存在しなくてはならないのか…

後藤　「誰が」っていうよりは「人間が」っていうことなんですよね？先ほどの宮島さんの言葉にもある通り。

宮島　そうですね。ユネスコ憲章の中に、「平和を築こうと思ったら、まず人間の心の中に平和を築かなければいけない」っていうのがあって。

池田　全くその通りですよね。

宮島　僕ら人間って、こうやって普通に話してる時は善良な市民なんですけど、何かきっかけがあると、違う民族を憎んでみたり殺したりっていうのが、どの国・どの地域においてもあり得るんです。

だから、私たちの心の中に、平和の砦っていうのをきちんと築いていかない限り、なくならないんだろうと思うんですよ。で、そのためには「想像力」っていうのがものすごく必要で、その想像力を鍛えるために、アートというツールがとても有効であると思います。

池田　そう思います。

宮島　しかも「平和」とか「戦争」とかっていう抽象的な話は、言葉で伝えようとすると、どうしても説教臭くなったり教条的になったり押し付けになったり、ということがあります。でも、アートという「表現」の分野であれば、「感情として共感できる」というところに持っていけるんじゃないかなと思うんですね。

でもこれはね、僕がずっと、30 年近く柿の木プロジェクトをやってきて、その中で考えたことなんです。最初は、そんなこと全然思ってないんですよ。段々だんだん、そういうふうに自分自身も変わってきたんです。

初めの頃は、自分もアーティストとして「勝つか負けるか」みたいな世界でずっと生きていて、柿の木にたまたま出会って子どもたちに伝えたいと思った時、今までの僕のキャリアが全く役に立たないし、むしろそういうキャリアの上に積み重ねていっても誰にも届かない、ということを思い知らされたんです。

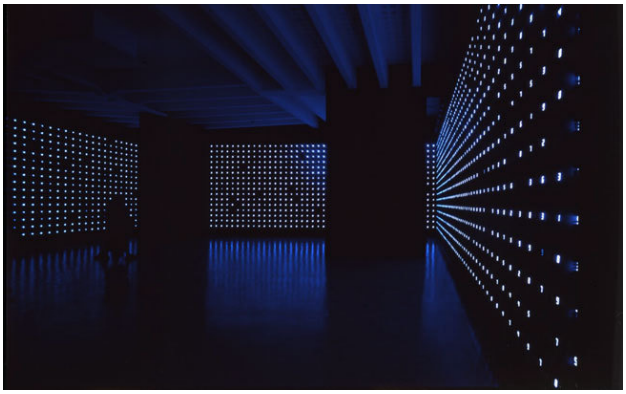
そうしていくうちに、自分の中でアートに対する考え方が、どんどん変わっていきました。それが僕の中では非常に大きいことでした。仲間と一緒に実行委員会としてやってきて、みんなと一緒に動くことで、自分自身が気づかされたことです。

飛躍のきっかけ「ベネチア・ビエンナーレ」

池田　お話を伺って、それは意外でした。世界的なアーティストである宮島さんが手がけるプロジェクトだということで動く人々も、やっぱりかなりいらっしゃると思うんです。99 年のベネチ

ア・ビエンナーレで日本館の代表として展示をされた時に、Mega Death と柿の木プロジェクトが2つの柱として展示されて、目にした人たちの心に、素直にこの二つの重みが入ってきたのって大きかったと思うんですよ。
草の根的に反戦や、人間としての善なるものを呼びかけるプロジェクトや行動は世界に数限りなくありますけれど、これだけアートと融合して語りかけているプロジェクトは、かなり少ないと思います。
宮島さんが今語ってくださった、ご自身のアート観の変遷というのも事実だと思うんですけれども、それでもやっぱり、アーティストという、世界中の人に響く表現の言語、言葉じゃないもので衝撃を与えられる言語を持ってらっしゃる方が語りかける重みと広がりは違う、と私は思っています。だから、柿の木プロジェクトは重みが違うし、届き方も全然違うと思うので、これから実際に、それを届ける一員になっていけることをすごく楽しみにしています。

宮島　非常に好意的に受け取っていただいているようで、ありがとうございます。
ただね、ベネチア・ビエンナーレの時も、最初はコミッショナーに「宮島達男の作品を展示してください」って言われたけど、柿の木プロジェクトの「か」の字も入ってないんですよ。あれは僕がねじ込んだんです。「日本館のアーティストを引き受けるのであれば、柿の木プロジェクト実行委員会という名前で、柿の木プロジェクトを展示してほしい」って。
コミッショナーは、その時柿の木プロジェクトのことをあまりよく知らなかったので、こういうプロジェクトで、と説明して。それで OK が出て展示したんです。ですから、名前的には 2 組のアーティストが出品しているという形になりました。で、イタリアや、世界の人たちの受け取り方は「宮島達男がやっている柿の木プロジェクト」というよりは、柿の木プロジェクトの空間そのものが評価されたんです、とてもハートフルだ、と。



Mega Death（1999 年）　photo：Shigeo Anzai

池田　なるほど。

宮島　柿の木の苗木を一本展示して、後は、柿の木プロジェクトは原爆のこういう問題を扱っていて、それで子どもたちにその苗木を配ろうとする活動です。と。ですから、平和に対する思いを皆さん書いてくださいって、壁にメッセージカード

ワークショップが開催されているビエンナーレ会場

を貼ってもらったんです。壁いっぱいに貼り付けてあるのは、世界中から訪問した人たちが残してくれたメッセージカードです。で、一番奥にある大きなテーブル、ここが絵を描いたりメッセージを書いたりするテーブルです。真ん中にあるのが、被爆した柿の木 2 世の苗木です。こんな風な会場でしたから、毎日毎日、市民の人たちや子どもたちが遊びに来るようになって、それがビエンナーレを見に来た人たちに大きな衝撃を与えたようです。

つまり、ベネチア・ビエンナーレというのは、国際的なアーティストのオリンピックみたいなものですから、競争なんですよ。でも、そんなアートの競争みたいな話は、ベネチアの市民には関係ないわけです。だから、自分の島でやっているにも関わらず、ほとんどの小学校の先生とか、ましてや子どもたちは見になんか行かないんです、ベネチア・ビエンナーレの会場に来たことがなかった。

ところが、柿の木プロジェクトが取材されて報道されるや否や、イタリア中から、先生が子供を引き連れて見に来るようになったんです。

池田　まさに、修学旅行で広島に行くような感じですね？

宮島　そうです。その、見に来た人たちの中で「ああ、ぜひ柿の木を自分の国にも植えたい」と思った人がすごく多く申し込んでくれて、あの時は200以上の申し込みがありました。

池田　すごーい！

宮島　ですから、確かにベネチア・ビエンナーレで一気にブレイクしたんです。で、そこからまた飛び火して。各地の植樹に参加した人が「じゃあ、今度はこれを自分の町でやりたい」「自分の村でもやってほしい」って、クチコミでどんどん広がっていったんです。

実現したアメリカでの植樹

池田　私が特に嬉しかったのは、アメリカの地に植えられたことです。

宮島　アメリカのダラスでの植樹は印象的でした。ダラスっていうのはアメリカでも非常に保守的な地域なんです。ホッカデイ・スクールという女学校の、ディー先生という先生から申し込みがあって「平和のことを伝えていきたい」「だけど、自分の学校は政府関係者の子女が多いんです。だから、とっても難しい」って初めから言ってました。それで、ディー先生がいろんな先生に働きかけて、「これはアートなんだ」っていろいろ説得してくれて、心ない批判なども浴びたようですけれども、最終的には実現したんです。ディー先生、一生懸命頑張ったんで、実現した時には泣いていらっしゃいましたね。

池田　今のエピソードのように、入り口がアートだということで、「許される」と言ったら失礼ですが、でも、そういうことはすごくあると思っていて。

宮島　そうです、あります。全くその通りです。

池田　自分自身でも、これはアートであり、人として必要な行いでもあるって、両方の意味で捉えてるんですけれども。

私たちも「東京で先端的な活動している人たち」みたいな捉えられ方をずっとされてきて、いろんなご縁があって越後妻有の地にもう一つの拠点を持った時は、「想像がつかない」って言われました。「“アートだ、デザインだ、東京だ”って言ってる人たちが、里山の田んぼの真ん中で何始めたの？」って。だから、先端的な現代アートの宮島さんがなぜ？という、周りの方の「ちょっと意外だ」という反応は、想像がつくところがあります。でもね、自分たちにとってどっちも本当のことなんですよね？どっちもリアルな自分であって

宮島　そうそう、まさにその通り。

池田　だから私たちも、これは別々のものではなくシームレスで、どっちも本当の自分たちなんだよって話をいつもしています。先ほど、柿の木プロジェクトをやってアート観が変わったとおっしゃいましたけど、私たちも、里山にいる自分たち、自然の真っ只中で里山の皆さんと一緒に生きてる自分たちという日常を持つことで、全く違う視点・視野と世界観を持つことが確かにできたので、そこは本当に生々しく共有、共感できます。どっちも自分なんですよ。

宮島　いやもう、ほんとに全くその通りです。アーティストである前に一人の生活者であったり、デザイナーである前に一人の人間だったりする訳ですから。年がら年中、24 時間 365 日デザインやってるわけじゃない、ご飯も食べればお風呂にも入る、人として普通のことなんです。だから里山で生活することも、シームレスに繋がっていくんですよね。

新しい出会いに向けて

池田　柿の木プロジェクトに触れた皆さんには、「人類は、いかによく振る舞い、いかによく生きていくことができるか」ということについて考える日常を、ぜひ持ち帰ってほしいと思います。もし苗木を植えることはできない環境にあるとしても、もう一つの自分として「悪魔的なものに心を開かない自分」というものを、持ち帰っていただけると嬉しいなって思います。

宮島　でもね、僕が始めた 1995 年当時は、美術界からは非常に批判があったんですよ、売名行為とも言われました。僕としては別にどう言われても良かったんですけど、とにかく「柿の木プロジェクトはアートではない」というのが、当時の、批評家の方も含めたアート業界の一般的な考え方でした。

2000 年代以降、エンゲージアートだコミュニティアートだっていろんな世代が出てきて、どれもアートと言っていいことになってますけど、当時はまだまだ、とても教条的でナローでステレオタイプな「アート観」が主流で、コンテンポラリーアートといえばベニス・ビエンナーレにバーンと出るようなものでなければならなかったし、作品とは形あるものとして存在しなければいけなかった。そういう点で、辛い思いはしました。

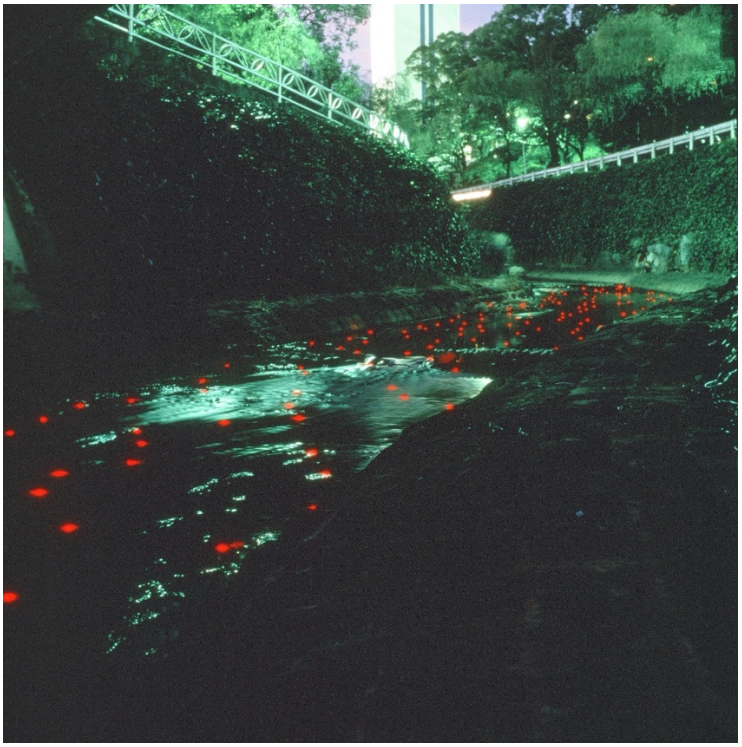
まあ、僕の辛い思いなんてのはどうでもよくて。だって、柿の木プロジェクトの現場に行って子どもたちと一緒に植樹すると、そこにはエネルギーがめちゃくちゃある訳です。この、表現のエネルギーは信じられる。それだけは信じられるし、あとは共有できる仲間たちと一緒だったからやってこれたっていうのが、正直なところです。

当時も、現場を見て批判してる人は、まずいませんでしたからね。見に来れないんですよ、遠い地方でやったり外国でやったりしてるから。なかなか現場は見れないんです。

池田　だからこそ東京で、来ていただけるような場所に植えたいですよね。もちろん台東区でもすくすくと育っていますけれども。

宮島　そうですね、ぜひ。深川は空襲のあった場所ですし、やっぱり「川」との縁ってすごくあるんです。長崎で、浦上川の支流に「時の蘇生・川」という作品を展示しました。広島もそうですが、原爆が落とされたのは河口付近なんです。つまり、川の中で、水を求めて多くの方たちが亡くなったという歴史があります。

これが浦上川の作品です。川の中に、亡くなった多くの方たちの命の光の象徴としてLEDを光らせて鎮魂する、そういう作品でした。



Revive Time in the River（1999年）

池田　私の夢として、これが深川を貫く隅田川でできたらいいな、というのがあります。この本所深川エリアも、やはり川に飛び込んで命を落としていった方々の記憶が刻み込まれている土地です。鎮魂と、またそれを無駄にしたくないという強い思いを伝えたいですね。

今、90年代の東京で全然受け入れられなかったというお話を伺って、耐え抜いてここまで続いてきたプロジェクトが、さらに先に続いていくきっかけの一つに、これがなってくれることを、心から祈っています。

宮島　ぜひ、植樹に繋げられることを祈っています。

後藤　そうですね。それはやっぱり、長い目で考えていくものかな、と思っています。

宮島　私たちはいつも、こちらからお願いして植えていただくというようなことは一切していません。準備ができて、「植えたいです」という申し込みがあって初めて、それをバックアップしていく。自発的に「やろう」という気持ちにならないと、なかなか地元では根付きませんので。

後藤　まず共感を得る。あるいはちゃんと伝わって、そこからいろんなことが整っていく。そんな部分を含めて、プロジェクトには必要というわけですね。

宮島　2017年にポルトガルの、大西洋の真ん中にあるファイアル島というところで植樹が行われたんですけど、担当の人は、その17年前にイギリスでやった植樹式を見て「いつか自分の

生まれ故郷に植樹したい」という夢を抱いて、ずーっと準備をして、島の人たちにネゴシエーションして、17 年かけて実現したんです。

池田　すごい！

宮島　すごいですよね、本当に。

池田　諦めないぞ！諦めないぞーと思いました、今。勇気をいただきました。

後藤　勇気をいただきましたね。すぐに、とかそういうことでもないでしょうし。いつか。この「いつか」を絶やさずに持っておければいいな、と思います。

池田　生きている間に、東京に植えます。

後藤　それも東の東京に、ね。

池田　人が来ようと思って来れる場所に、やっぱり植えたいです。なかなか地方にいけなくなるコロナとかを経験すると、目につきやすい所、思いたった時に来てもらえる所に植えさせていただきたい、という思いがあります。頑張ります。

宮島　ぜひぜひ。

池田　今日はほんとに貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

＊このテキストは、「カキノキ⇄ギフト」展示の同タイトル作品の“ロングバージョン”として、Web にて公開される映像の内容を、一部加筆修正したものです

©カキノキ⇄ギフト　2021

カキノキ⇄ギフト
時の蘇生・柿の木プロジェクト実行委員会
吉武真理
荒生真美
藤原聖子
峯岸志保美
宮島達男
宮島依子
藤原光寿
＋
gift_
池田史子
後藤寿和
渦波大祐